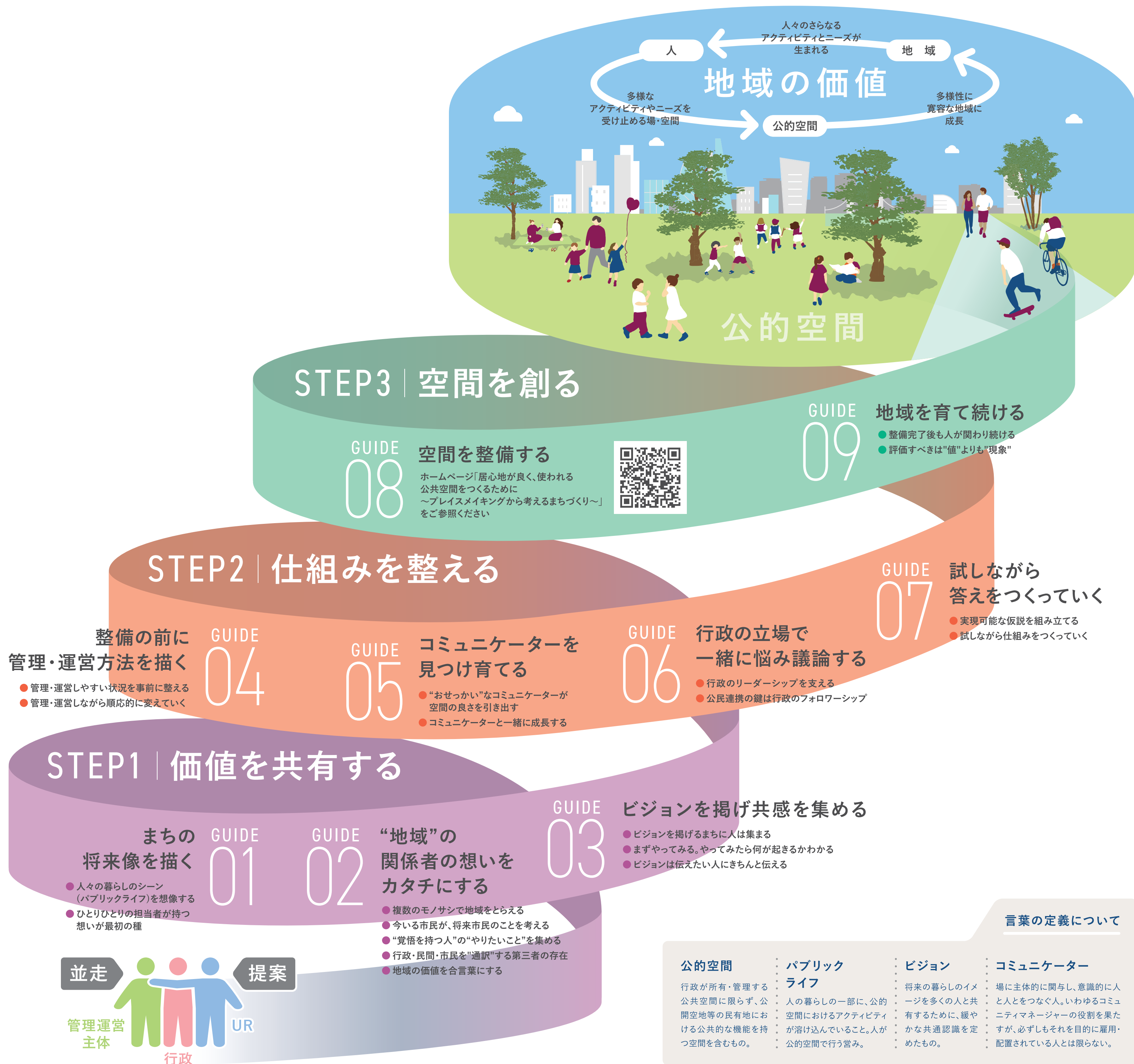


URの考える 地域の価値 を向上させる 公的空間 づくり



URの考える
公的空間実現の
方法論について
事例研究や有識者との
検討会を重ねながら
理解を深めています。

価値観の多様化は人々のアクティビティや潜在ニーズの多様化を生み、それらを受け止める「公的空間」の必要性が増しています。そのような「公的空間」が寛容な地域を成長させ、さらに人々のアクティビティや潜在ニーズを生み出し、また新たな「公的空間」が創出されていく。URはこの好循環が絶えず起こることこそが地域の価値ではないかと考え、それを実現するためのプロセスについて、3つのステップと各ステップで悩んだ際の道しるべとなる9つのガイドを設け、図化しました。



まず、そこで目指す暮らしの変化や、そこにあるべきシーン、人々のパブリックライフを先に決めるべき。

個人のパブリックライフが集まって、まちを形成する。

GUIDE 01 まちの将来像を描く

管理運営をどうやるのかより、なぜやるのかを明確にすることが大事。

そういった意味では将来ビジョンを行政側が持っている必要がある。

仮説でもいいので、行政がこうなりたいというシーンを持って、事業者や地元を説得し、コミットするという一連の流れがあるべき。

GUIDE 01 まちの将来像を描く

まちの印象を決めるのは人。

人がまちの印象を決める。魅力的なまちには魅力的な人がある。このことは都市の魅力の本質ではないかと思う。

GUIDE 05 コミュニケーターを見つけ育てる



武田 重昭
大阪公立大学 准教授

ランドスケープの視点から都市と暮らしの関わりについて教育・研究を行っている。UR都市機構、兵庫県立人と自然の博物館を経て現職。URでは団地屋外空間の計画・設計や都市再生における景観・環境施策のプロデュースに携わる。共著書に「小さな空間から都市をプランニングする」(2019・学芸出版)など。

かつてル・コルビュジエが「輝く『都市』」と言ったのに対して、URは「“人が”輝く都市」をミッションとして掲げています。ここには都市再生には何よりも人が大切だというアーバンル・ネッサンスの考えが表れています。ぜひこの原点に立ち戻って、公的空間を舞台とした人が生き生きと輝く都市への再生を目指す組織であり続けてほしいと思います。

そのためには単年度ごとの予算執行や政治的な任期といった期限にとらわれず、都市の魅力とは長い時間をかけてつくり出されるものだという姿勢が不可欠です。一過性の賑わいやエリアに閉じた効果を求めるのではなく、長い目と広い視野をもって都市スケールでの時間軸と空間軸を見据えた都市の魅力を考えるための持続性が必要です。そのプロセスにおいてURが培ってきた膨大な知識や知恵を共有し、都市の魅力とは何なのか?答えがひとつではない問いを多くの人びとと考える都市コミュニケーションの促進を期待しています。都市の未来は人びとのコミュニケーションの中から生まれるはずです。

経済価値に対抗できるものを、まちづくり側でちゃんと持っておくべきではないかと常々思っている。

くらしの多様性と云ったらよいか、くらしぶりの質自体が上がっている、といったようなことが経済的なものに対抗し得るのではないか。

GUIDE 09 地域を育て続ける

公的空間を使うための制度を使う話ばかりになりがちだが、そうではなく、パブリックライフを実現するために何がやりたかったのかをもう一度鑑みて、制度を使う必要があるかを再確認することが非常に重要。

GUIDE 07 試しながら答えをつくっていく

キーマンのサポート方法で大事なのは、裁量を民間に委ねること。

行政責任で行うとクレームが行政に集まり、それに対応してできないことが増えていく。

GUIDE 06 行政の立場で一緒に悩み議論する

市民の巻き込み方の工夫は

欲しいもの集めではなく、やりたいこと集めを必ず行うこと。欲しいもの集めは市民が要望を言うだけになってしまうため、自分たちがやりたいことが何かを積極的に集めた方がいい。

GUIDE 02 “地域”の関係者の想いをカタチにする

ビジョンに良い悪いはない。良い悪いよりも、

みんながそれを共有してイメージできること自体にすごく意味がある。

GUIDE 03 ビジョンを掲げ共感を集める

評価したいのは値より現象の方。

例えば指標に届かなくても、「このような現象が起きているからよし」と言えるようにできるとよい。それでも納得しない人たちがいる場合に数値が後押しする。値を示すのではなく、こう反映されていきますよ、変わっていきますよ、という可能性を示せば、ビジョンに反応しにくい層にも訴えることができる。

GUIDE 09 地域を育て続ける

人探しは飲みに行くのが早いかもしれない。腹割って話せるようになるしかない。

GUIDE 05 コミュニケーターを見つけ育てる

アクティビティファーストの話は絶対ある。先に活動をやってみて、アジャストする空間を作るほうがうまくいくと思うことが多い。

GUIDE 03 ビジョンを掲げ共感を集める

今の市民だけで決めると、利害関係の中での合意形成だけになる。そうならないためにも、

将来的に市民になる可能性のある人に価値を置き、今いる市民でその対象者を設定するやり方が良いと思う。

GUIDE 02 “地域”の関係者の想いをカタチにする

有識者との検討会で生まれた 心に留めておきたいコトバ

地域の価値にはそのまち特有の特徴的なコンテンツもあれば、共通の普遍的なものもある。必ずしも、城など特徴的な地域資源である必要はない。

快適に過ごせる場所が身近にあって、自分も携わっていると感じられる空間であればどこでも良い。それが地域ごとに設定できれば良い。

GUIDE 01 まちの将来像を描く

管理運営の体制は、どんどん変わっていくべきもの。1回決めて終わりではなく、

そのときに応じて、順応的に変えていくマネジメントが大切。

現場の状況に応じて、臨機応変に対応できる運営のシステムを提案できると、すごく魅力的で、長い付き合いができるURらしい提案。

GUIDE 04 整備の前に管理・運営方法を描く

架空の市民だけではなく、必ず自分や家族を入れて自分だったらどう過ごしたいかを考えてほしい。

評論家のようにペルソナ設定するのではなく、主観を入れて自分事にしてほしい。

GUIDE 01 まちの将来像を描く



木村 優介
大阪工業大学 特任准教授

2013年、京都大学大学院工学研究科 博士後期課程修了。国土技術政策総合研究所、京都大学を経て2023年より現職。都市に関する研究として、空間情報学を活用した歩行環境や観光行動の分析、インフラ空間の利活用による都市再生、戦後土木施設の歴史・文化的価値に関する評価などに取り組んでいる。

公的空間のあり方を考えるとき、顕在化した課題への対応だけで解決しようとするこの問題はこの検討会でも議論になりました。ただし現実目に向けて、社会全体の変化のスピードが増し、近視眼的になる状況が生まれやすくなるなかで、URからの提案を受ける行政において、現状の課題の解決のみが公的空間づくりの目的となる可能性が高まっているとも言えます。今回の検討会での議論を通じて、行政がビジョンを持って公的空間の価値を共有・発信し、計画づくりから運営体制の構築までを戦略的に進めるために、URの仕事がますます大切なことを改めて実感しました。特に、「公的空間の計画・設計を暮らしのシーンとどのように結びつけるか」という重要なテーマに取り組むことを、URの皆さんの職能としてまとめられたのは良いことだと思います。行政とURとの間のコミュニケーションが、市民の方々を含めた公的空間の関係者、ひいては社会全体の意識を変えるきっかけになることを願っています。



園田 聡
有限会社ハートビートプラン 代表取締役

2015年、工学院大学大学院博士課程修了。博士(工学)。2016年有限会社ハートビートプラン入社。2023年より現職。日本都市計画家協会理事他。専門は都市デザイン、プレイスメイキング。大阪・東京を拠点にプレイスメイキングに関する研究、実践に取り組む。著書に『プレイスメイキング アクティビティ・ファーストの都市デザイン』。

検討会において、公的空間を地域の価値向上につなげることを目的にしていることが重要です。特に日本では、検討会で議論していたような「豊かさはどうあるべきか」といった本質的な議論の必要性を強く感じています。「理想の都市像」や「理想的な暮らし」と呼べるロールモデルがなくなってしまった今、手法やルールのみならず、行政も含めた組織のあり方などから変えていかないと根本的な社会課題の解決につながらないのかもしれない。そういうことも含めて、この検討会で議論ができたのは意義のあることだと思います。

理念は大切ですがやはり実践してナンボです。特にそのフィールドは地方にあると感じています。事業構築の段階からURが伴走し、本質的な課題解決に向けて一緒に取り組むローカルデベロッパーがいずれ自走していけるようになっていくとよいのではないかと考えています。風の人としてURが入ることで、時代にあった開発モデルを実現できることはとても価値があると考えます。

一緒にやっていけると思う基準はその人が自分の言葉で話しているかどうか。

役職は関係なく、自分の考えをもって話せる人。

GUIDE 06 行政の立場で一緒に悩み議論する

何ができる場所か、の説明よりも、こういう場所があるから実現できる

ライフスタイルといった一つ先の視点で考えた方が良い。

GUIDE 02 “地域”の関係者の想いをカタチにする

お金以外の部分で継続性が担保できることも重要。

行政のスキルやノウハウを積極的に民に投資することは、お金にかえられない価値がある。

GUIDE 06 行政の立場で一緒に悩み議論する

特殊な人だけがキーマンになれるということではない。誰にでもなれる。

それぞれの立場で都市を愛して、都市のためにひと肌脱げる、という人がいることが、その都市の価値を決めているという気がする。

GUIDE 05 コミュニケーターを見つけ育てる

発行

UR都市機構西日本支社 都市再生業務部
大阪府大阪市北区梅田一丁目13番1号 大阪梅田ツインタワーズ・サウス 21階

業務受託者：株式会社URリンケージ西日本支社 都市再生本部